

氏名	むかい かつとし 向井 克年		
学位の種類	博士（文学）		
報告番号	甲第 1742 号		
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 14 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）		
学位論文題目	上代日本語におけるク語法の研究		
論文審査委員	（主査） 福岡大学	教授	山縣 浩
	（副査） 福岡大学	教授	山田 洋嗣
	福岡大学	教授	江口 正
	京都大学	准教授	佐野 宏

内容の要旨

本論文は上代日本語におけるク語法についての研究である。ク語法は活用語に接続して名詞句を形成する言語形式である。現代日本語では「いわく」「ねがわく」など、一部の語として僅かに残存している。しかし、上代日本語にあっては様々な活用語に接続し活発な使用が認められる。一方で、上代日本語には同じく名詞句を形成する形式として準体句があった。ところが、この両者の意味関係は次の 2 点において質的に等価ではない。

1 点目は、それぞれの名詞句が文（歌）の中で目的格の位置にくるときの、その主文述語における偏りである。ク語法が目的格に位置する場合は、動詞「思フ」が述語になり易いのに対し、準体句が目的格に位置する場合は「見ル」が述語になり易い。つまり、思惟の対象になるか知覚の対象になるかという対立がみられるのである。2 点目は、接続助詞「ニ」が名詞句に後接する場合に現実の出来事の発生と結果を順次並べるような「機縁性」と呼ばれる意味が準体句では認められるのに対し、ク語法には認められないという点である。つまり、現実を生起している客観的な出来事を表すような例がク語法にはないのである。

以上の 2 点はク語法と準体句にある傾向的な相違点として従来指摘されてきたものである。その中であって、本研究の目的はク語法に意味論的意味を認めることで準体句との差異を傾向としてではなく、より原理的な次元で捉えようとする点にある。そのために、ク語法における意味論的意味を可能世界というタームで表現している。可能世界は話者の主観に根差した事態の認識である。これは、準体句のような事実をありのままに描く事態認識とは対立的な性質である。そして、ク語法が可能世界を表すという点を次のような観点から確かめた。

まず、名詞句が目的格の位置にくる場合である（第1章）。「見ル」の目的格にク語法が位置する場合は、非現在の事態や、対象の属性を表す例しか存在せず、ク語法が現在のありのままの事態を表す例がみられない。つまり、ク語法には想念や評価といった話者の主観的な認識を表すような例しか存在しない。一方、「思フ」の場合は文字通り思惟の内容を表すのであるから、ク語法がこの「思フ」の目的格になることが多いという事実と総合してク語法の表す事態の様相を準体句とは決定的に異なることをみた。

また、願望を表す動詞「欲ル」とその形容詞形「欲シ」の対象にク語法がなる場合と、ならない場合を比較し考察した（第2章）。そこでク語法が対象となる場合の特徴として、願望行為が継続的、願望達成条件の存在、助動詞「ム」の接続が必須などの点がみられた。そして、これは準体句にはみられない特徴である。これらは、いずれも願望行為が特定の時空間に定位されない脱現場的・脱時間的な事態を表している。また、助動詞「ム」の接続は、ク語法が本来有していた可能世界を表すという意味が、願望表現という文脈の中に置かれることでより意識的に分出された形式であると考えた。

次に、形容詞ク語法と形容詞準体句に助詞「ニ」が後接する例について考察した（第3章）。従来論では名詞句内述語の品詞に関しては特に問題としていないが、他方、形容詞はその語彙的な性質上、文脈に依存するかたちで主観的にも客観的にもなり得る表現である。そこで、形容詞形に限定することで従来論では捉えきれなかったク語法と準体句の異なりをみようとした。形容詞ク語法＋「ニ」では、評価や感慨など話者の個人的な感じ方が問題になる例がみられるのに対し、準体句形容詞＋「ニ」は一般的な想定に基づく属性付与しかみられない。このような違いはク語法の一般的な性質から導かれるものであり、準体句との原理的な異なりを示唆している

以上のような、主観や客観といった観点は従来モダリティー研究の中で問われてきた問題である。そこで、ク語法内述語に助動詞「ケリ」が接続した例を対象に考察した（第4章）。「ケリ」は過去を表す以外に話者の気付きなどのモダリティーの意味を表す助動詞である。一方で、ク語法内に接続する他の助動詞をみると、「ベシ」「マシ」「ラシ」などのモダリティーの意味を表す助動詞は接続することがない。ク語法に接続する「ケリ」の例も、テンス・アスペクトを表す例のみであり、これによってク語法はその内部にモダリティーの意味を表す助動詞を接続することが例外なく存在しないことを確かめた。これは、モダリティーの意味を表す助動詞群とク語法とが文法カテゴリーにおいて等価な関係にあるとみることができる。ク語法内部における特定の助動詞群の非接続はク語法が単なる名詞句形成形式であるだけでなく、意味論的に特立される形式であるということの意味する。

このように、可能世界を表すク語法は様々な文環境においてそれぞれの意味を表しながらも、事態認識の仕方において準体句とは対立的に使用されている。

審査の結果の要旨

本申請論文の最大の成果は、上代日本語、特に「万葉集」におけるク語法について、「可能世界」という用語を用い、その特徴を原理的に説明した点である。

「可能世界」とは、話者の主観に根差した認識である。従って、それは他者のとの共有を前提とする客観的認識の対極にあるもので、具体的には、想念・感慨・想像・想定・思惟・仮定・評価・回想・概観など、様々な認識態度を示す。

申請者は、以上の如きク語法を持つ「可能世界」の特徴を次の3種の用法における準体句との比較によって明らかにする。

ク語法が動詞述語「見ル」「思フ」の目的格になる場合（第1章）

ク語法が願望表現「欲ル」「欲シ」の対象となる場合（第2章）

ク語法形容詞＋「ニ」（第3章）

いずれも対象とする用例につき、適正な読解に基づいて、ク語法は話し手の主観に根差した認識に基づき、準体句は他者のとの共有を前提とする客観的認識に基づくものであることを主張する。

就中、「可能世界」が最も鮮やかに実証されるのは、雑誌『万葉』226号に掲載された第1章である。即ち、ク語法を目的格とする動詞が「思フ」18例・「見ル」6例、準体句を目的とする動詞が「思フ」3例・「見ル」46例の如く偏ることを出発点にして、次のように対比的に捉える。

「思フ」の目的格の場合；ク語法は事態の中に話者自身を置く、いわば自己を客体視した事態を表し、準体句は事態をどのように評価して述べ立てるかという話者の主観的な表出を表す。

「見ル」の目的格の場合；ク語法は話者の心内に投影した、未来または過去の事態、または話者によって見立てられた事態を表し、準体句は話者だけでなく他者も同様の認識を共有できる、客観性の高い事態を表す。

これらに基づいてク語法は、未実現であるものの、実現可能性を潜在させた事態を描写する、即ち、現実世界における未実現の事態世界と区別される、話者の内面に構成された実現可能な事態を描写するとまとめる。

またこのようなク語法の特徴に基づいて従来の文学的解釈に貢献できる事例を示す。勿論、文学的解釈と言語学的事実は異なる次元において語られるものであるが、両者の立場を総合・止揚することによって、より確かな「万葉集」の実態を明らかにし、新たな「万葉学」の可能性を示す。

以下、第2・3章では、第1章の主張を補強し、また多様な「可能世界」の内実を明らかにする。即ち、第2章では、願望を表す「欲ル」「欲シ」の対象にク語法が来る場合と準体句が来る場合を比較する。本章は第1章の延長に当たり、第1章で述べたク語法の特徴は願望表現において更に顕著に観察され、特にク語法の特徴として継続性・非確定性・

未実現性が挙げられると主張する。

第3章では、形容詞がク語法となって助詞「ニ」が後接する場合と形容詞が準体句となって助詞「ニ」が後接する場合を比較する。この場合、ク語法に関する従来の知見を押し進め、当語法は形容詞の表す状態や性質が話者の内面の感じ方を問題とする評価や感情を表すとして、準体句の場合と決定的に異なると主張する。

第4章では一転して、ク語法内部に主観的な意味を表す助動詞が現れないことを確認した上で、例外に見える助動詞「ケリ」が現れる例を検証する。その結果、ク語法内の「ケリ」は「気づき」＝単に過去にそのような事態があったことを示すに過ぎず、第3章までの主張と矛盾しないとし、併せてク語法が主観的な意味を表す助動詞を接続させない理由を説明する。

しかし、一方で、本論文には、「可能世界」という用語の命名上の妥当性、対象としたク語法の用例が全531例の約2割程度に留まることなど、更に考察を行うべき課題も少なくない。しかし、語用論的な使い分けの基準は、自分だけか、他者と共有できるか、事態の把握がどのような枠組みで行われているかという観点から、ク語法は事態に対する主体の見立てを述べる形式であるとし、準体句との相違点を明確にした点は、将来学界の定見となりうる。また一部であるが、分析結果を古代文学作品に適用して、従来、解釈が揺れ、諸説ある古代和歌の訓詁を文法的視点から合理的に確定することに成功した点も高く評価できる。

このように申請者の研究は、用例分布からの日本語学的着想、認知言語学的思考、和歌に対する訓詁注釈の総合による古代語研究で、スケールが大きく、今後の発展が大いに期待できる。その中で特に日本語学での研究成果を日本文学研究において再検証し、翻って自らの新知見の妥当性を担保するという方法は、特筆に値する。そして、立論の安定感と記述の信頼度の高い本論文は、論理展開において適正かつ明確で、論旨において常に一貫性及び体系性を有する。

以上の諸点により、本申請論文は、福岡大学の博士学位論文として学術上積極的な意義を有し、これをもって博士の学位を授与するに余りあるものであると判断できる。